

# 『トム・ソーヤーの冒険』

## — トウェインの意図する冒険とは何か

本 城 精 二

### 序：冒険とは

『トム・ソーヤーの冒険』*The Adventures of Tom Sawyer* (1876) はアメリカ文学の古典であり、作者マーク・トウェイン Mark Twain (1835-1910) の代表作のひとつと言える傑作である。ユニークで奇抜な発想をするトムという少年を主人公にして、彼を中心に少年の世界を描いたこの作品には作者の少年観が縦横に示されている。

作者は幼少期を過ごしたミズーリ州ハニバル Hannibal をモデルにして、この傑作を生み出している。トウェインの研究家である S. Railton はこの作品について次のように指摘している。“Although Sam Clemense had run away from the world of his boyhood... as Mark Twain, he decided to go back to it: to transform his memories of growing up in Hannibal into Tom’s adventures in a village named St Petersburg.”<sup>1</sup> ということば通り、マーク・トウェインという作家として、この作品を完成しているのである。本名はサムエル・クレメンス Samuel Clemense であり、作家となる前はサムである。しかし作家として成功し、そして作家として活動や作品について論じる際は筆名であるマーク・トウェインと呼ぶほうが適切であろう。ともかく筆名で『トム・ソーヤーの冒険』を世に出したのである。作品の中で描かれている St. Petersburg という場所は今日も実在するハニバルがモデルである。

トウェインが少年時代を過ごした懐かしい思い出を『トム・ソーヤーの冒険』の中に描いているが、時代背景はいつ頃であろうか。それについて批評家の L. Ziff が “Twain’s memories of his boyhood in Hannibal, Missouri, in the 1840s”<sup>2</sup> と記している。作品の中では年月について明示されていないが、描かれている

内容からある程度年代を推定することができる。それは1840年代で、作者がミズーリ州ハニバルで少年時代を過ごした頃である。作品の中に登場する少年たちの年齢についても明確な記述はないが、それ自体作者の意図であろう。読者に自由に登場人物の年齢を想像させようということであろう。ともかく懐かしい故郷での少年時代の思い出を描くことが作家としての重要な課題であったのであろう。その結晶がこ作品である。

作者の少年観を示すことばの中で重要なひとつは「冒険」ということばではないだろうか。冒険とは普通の意味では、危険をおかして未知なところを探検し、それまでにないものを発見することである。もし失敗したり過ちを犯したりすれば、命を落とすことになるというのが、通常言う冒険であろう。しかしこの作品では少し違った意味のように思えるのである。作者トウェインが意図する冒険とは何だろうか。

『トム・ソーヤーの冒険』について論じる時、この「冒険」ということばの意義を追究することはもはや古過ぎる課題であるかもしれない。言い古された問題ではあるが、今一度検討してみたい。それなりの価値のある重大な問題であると思えるのである。何故なら作品の中心テーマに関わるからである。この小論で再度、作品を通して少年の冒険の意義と作者マーク・トウェインのそうする意図を考察してみたい。

## I. 「新しさ」の発見

この作品にはいくつかのストーリーが絡みあって提示されている。ひとつのストーリーが提示されたかと思えば、次の章では別のものが提示されたり、また次の章では別のストーリーの陰に潜んでいたものが浮上して提示されたりというように、少年達の日常生活をどこにでもあるような現実的なものとして提示している。無理に創作したようなものではなく、ごくありふれた少年の世界を提示しているのである。そのような日常生活の中に一体どのような冒険があるのだろうか。

少年にとって冒険とは危険をおかしてなす大人の冒険とは異質なものである。大人が子供を育てる時には子供の行動を注意し、言動の良し悪しを理解させ、社会性を身に着けて立派な大人に成長するように望むが故に、子供を教育し、

物心の両面で育てようとするものである。そのような目的のためには、ある程度子供の言動を制限するであろう。そのような制限が枠組であり、そのような枠組を大人が設定し、その中で子供は成長していくというのが普通の子供の過程であろう。しかしそのような枠組をはみ出れることも少年期にはありがちである。そのような枠をはみ出した少年を描いているのがこの作品ではないだろうか。つまり大人が設定した「お利口少年」や「模範少年」という、少年に対する期待像というものがあるが、そのような枠をはみ出した少年がトムとその仲間であると言えるであろう。しかしそのように大人の設定した枠をはみ出した少年は世界中どこにでも存在しているのではないだろうか。

トムの特徴を端的に示す部分を引用してみよう。

He was not the model boy of the village. He knew the model boy very well, through, and loathed him. (p.21)<sup>3</sup>

ここに示された“model boy”とはトムの弟のシドSidのことである。シドとは違って、トムは「模範少年」ではなく、大人の設定した枠をはみ出した少年である。そのような特質や行動が少年の冒険と何らかの関わりがあるのではないだろうか。トムの言うこと、することは模範少年のものではないが、何か憎めない心の温かいものが感じられるのである。トムの言動に焦点を当てて考察してみると冒険に繋がるものがあるのではないだろうか。

トムのペンキ塗りの描写がユニークであり、読者の関心を引きつけるものである。またペンキ塗りの件がトムにとっては一種の「新しさ」の発見である。この「新しさ」の発見が少年にとっては冒険ではないだろうか。ペンキ塗りは本来トムへの懲罰であったはずである。しかしそれをトムの策略によって快楽とユーモアに変化させていくのである。そこでトムが知った法則があるが、その法則こそ新しさの発見であり、少年の冒険である。その法則とは次のようなものである。

He had discovered a great law of human action, without knowing it, namely, that, in order to make a man or a boy covet a thing, it is only necessary to make the thing difficult to attain. (p.32)

ここに示されているように、容易に手に入れがたいとなれば、ますますそれが欲しくなるという心理をうまく逆手にとったものが例のペンキ塗りの件である。義務とか職務とか任務となると「したくない」という心理が働くが、お金のかかる贅沢な娯楽となると、喜んで「してみたい」という気持ちになるものだというのを、ユーモアたっぷりに描いていると言えるだろう。

さらにイギリスの裕福な紳士が馬車を走らせる例を挙げている。そのような楽しみは特権でもあるし、それなりの費用もかかる。しかしそれが楽しみの源である。もしも賃金を貰って、職務として馬車を走らせるとなれば、それは楽しみではなくなるという事例である。“If they were offered wages for the service that would turn it into work, then they would resign.” (p.32) この一文が示すように、報酬として賃金を受け取る職務となれば、それは楽しみや喜び、あるいは趣味でもなく、特典でも特権でもなくなるのである。この法則をトムが発見した形にして、作者であるトウエインが読者にユーモラスに提示しているのである。

トムはペンキ塗りの一計で集めた宝物を元手にして、聖書がもらえるカードを他の子供達から集めるという件がある。日曜学校が始まる前に、聖書一冊を褒美として貰えるだけのカードを調達し、まんまと聖書を受け取るのであるが、それもまたユーモアと冒険の証である。聖書の句を暗唱すると、それに応じたカードが貰えるという設定であり、それについてトウエインの研究家W. E. Phippsが<sup>3</sup> “Tickets representing the recitation of two thousand verses could be exchanged for a Bible. Generally it took years to earn this prize, and few children were able to amass enough tickets.”<sup>4</sup> というように指摘している。確かにこの引用文が示す通りである。

本来ならば聖書の文言を2,000句覚えた場合に褒美として一冊の聖書が貰えるという設定である。別の言い方をすれば、2,000という多数の聖書の教えを覚えた褒美として聖書を受け取るはずのものである。ところがトムは聖書の文言はおろか、キリスト教の基礎的な知識も持ち合わせていないのである。聖書を受領した後で来賓の判事から、キリストの12人の弟子のうちの最初の二人の弟子の名を尋ねられる描写がある。“Now no doubt you know the names of all the twelve disciples. Won't you tell us the names of the first two that were appointed?” (p.51) と言われて、トムは答えられないのである。もちろんこれ

はユーモア作家の見事な設定であり、作者の意図したトムの姿そのものであると言えるだろう。

作品の第5章では、教会のなかで牧師の説教に飽きた会衆をトムが喜々とさせる描写がある。トムの持参していた虫と偶然教会に入ってきた犬との出来事に、見る人を楽しませるという描写である。“The neighboring spectators were shook with a gentle inward joy, several faces went behind fans and handkerchiefs, and Tom was entirely happy. (p.58)”という一文が教会内の雰囲気とうまく伝えている。さらに犬と虫の件が劇的な高まりを示すのである。教会という厳粛なイメージの中で、牧師の説教に退屈するという世俗性が、犬と虫のじゃれ合いの描写に絡み合って劇的な高まりをさらに倍增しているのである。

聖なる教会の中での世俗性がトムの喜びに繋がっている。もちろんそのような聖と俗の結合を提示することは作者の重大な意図でもある。“By this time the whole church was red-faced and suffocating with suppressed laughter, and the sermon had come to a dead standstill.” (p.59) という一文は、聖なる教会を笑いの場に変貌させていることを示している。そしてその仕掛け人であるトムは上機嫌で、大満足な気分に入るのである。これこそ決められた枠からはみ出たいたずらっ子の姿である。トムのすることは決して良いことではないが、そこには読者を喜ばすほえましさがあり、許せる類のいたずらである。そしてまたトムの行動を描写するように見せかけながら、一般会衆の世俗的な一面を暴露しているのである。教会に集まっている人々は敬虔なキリスト教徒のように見えるが、実は「人は皆世俗的なものですよ」と作者が語っているのである。それこそ作者の狙いであると言えるだろう。

作者トウェインはトムを奇抜な発想をする少年として描いている。トムはしばしば自分が死にかかっていたり、あるいは死体となっている場面を想像するのである。そうした時に伯母さん Aunt Polly がどんなに嘆き悲しむかという想像をするのである。そのような想像がジャクソン島へ海賊ごっことして逃避する場面に繋がっている。“He pictured himself lying sick unto death and his aunt bending over him...” (p.38) という部分や “And he pictured himself brought home from the river, dead, with his curls all wet...” (p.38) という部分がそれである。その想像が再び浮上した時、トムは親友のジョー・ハーパー Joe Harper とハック Huck を仲間にしてジャクソン島へ逃避するのである。これこそトム

の好む冒険であると言えるだろう。

ジャクソン島で海賊の真似事をして遊ぶ一方、トムは夜にそっと自分の家に忍び込むという描写がある。そしてトムの家族とジョーの母が悲嘆にくれている様を、ベッドの下に隠れて会話を聞くという一件である。まさしくトムが想像していた伯母さん達の嘆き悲しむ光景を陰に隠れて、次の遊びの策を考えているのである。つまりその企てをすること自体を楽しんでいるのである。そのことをジャクソン島に戻ってジョーとハックに話すのであるが、それこそが作者の描きたい少年の冒険であろう。“Tom recounted (and adorned) his adventures.” (p.133) ということばが、それを物語っていると言えるのではないだろうか。

トムとジョーがジャクソン島ではじめて煙草を吸い、気分が悪くなったことも新しい経験であり、一種の冒険であると言えるだろう。しかし海賊ごっこの一連の出来事の中で最も感動的な冒険は自分たちの葬儀の最中に堂々と教会に現れることであろう。その時のトムたちの描写は次の通りである。

...the congregation rose and stared while the dead three boys marching up the aisle, Tom in the lead, Joe next, and Huck, a ruin of drooping rags, sneaking sheepishly in the rear. They had been hid in the unused gallery, listening to their own funeral sermon! (p.146)

自分たちの葬儀をこっそりと見て、しかも牧師の説教をしっかり聴いている少年たちは至極満悦していることであろう。そのような経験は誰もしたこともなく、それにより彼らは村のヒーローともてはやされるのである。これこそトムの求める栄光である。そのようなトムの姿こそ作者トウエインの描きたい少年像であろう。

ジャクソン島から「生還」した少年たちは村のヒーローである。“What a hero Tom was become now!” (p.152) という文が端的にそれを示している。また “They began to tell their adventures to hungry listeners...” (p.153) という表現が少年たちの心理を上手く表している。また自分たちの葬儀の最中に出現した少年たちについて、トウエイン研究家のS. Railtonは次のような指摘をしている。

By reappearing in church at his own funeral, Tom not only triumphs over death, but at the same time turns the mournful villagers into “the house” for whom he is putting on a show. The church becomes a kind of theater, in which Tom’s clever stage managing gives the villagers the most deeply moving experience they had ever had in church...<sup>5</sup>

この引用文が示す通り、トムはヒーローであるばかりではなく、教会自体が一種の劇場となっているのである。それは村人がそれまで経験もしたことのない “a theatrical illusion”<sup>6</sup> となり、少年たちの冒険の結果が大きな喜劇に繋がっていることを意味している。

トムは他の人を陥れようという悪意的な意図はないが、それでもトムはユーモアを伴った嘘つきの天才であると言えるだろう。トムたちが溺死したとされていた時、ポリー伯母さんの悲しんでいるようすを実際に見ていながら、「生還」した後嘘をつくのである。伯母さんの夢を見たという話も完全な嘘である。しかし彼の嘘は人を陥れるようなものではなく、ただ滑稽なおかしさを伴うものである。それ故にポリー伯母さんも寛大であり、“I know the Lord will forgive him because it was such good-heartedness in him to tell it.” (p.160) というように、トムの心の優しさに気づいているのである。そして” I could forgive the boy, now, if he’d committed a million sins!” (p.160) という独白が示す通り、伯母さんはトムを愛情深く見守っているのである。トムはベッキーをかばうためにわざと嘘をついて、ベッキーに代わって先生からムチ打ちの罰を受けるという件があるが、それも良い意味の嘘である。トムは何度も嘘をついている。しかし悪意的な嘘は許せないが、他の人を喜ばせたり、勇気づけたり、不安を軽減するように、他の人の為になる善意の嘘は許せるであろう。トムの嘘は許せる類の嘘である。それは作者が狙いとするものであろう。

## Ⅱ．冒険とヒーロー

『トム・ソーヤーの冒険』はトム中心の奇抜な出来事が様々な形で絡み合っており、一連の物語として展開するのである。トムとベッキーBeckyの小さな恋の物語。インジャン・ジョーInjun Joeの墓地での殺人事件。マフ・ポッター

Muff Potterが濡れ衣となり逮捕され、裁判にかけられ、そしてトムの証言という一連の事件。その他諸々のトムのユニークで奇抜な行動が相互に絡み合っ  
て一連の物語は構成されている。そして何か事件が起こり、それが解決した後、  
トムは必ずヒーローとして周囲の人々からもてはやされるのである。

トムはベッキーをはじめて見た時から心をときめかし、恋心を抱くのである。  
彼がハックと話し込んで学校に遅れたとき、罰としてベッキーの隣に座らされ  
る羽目になるのである。しかしそれを罰とは感じずに、トムはむしろ喜びと感  
じるのである。そしてとても可愛い少女ベッキーに心をときめかし、“*I love  
you.*” (p.71) と石版に書いて告白しているのである。それまでトムはエイミー  
Amyが好きだったという設定であるが、ベッキーの虜になってからはエイミー  
のことはすっかり忘れてしまっているのである。それほどベッキーに夢中なの  
である。そのようにいっきに燃え上がった恋の焰は作者の少年時代の思い出で  
ある。それをまるで昨日のことのよう鮮明に憶えている作者自身の胸の内を  
暴露しているのと同じである。作者の少年時代の恋の思い出のひとつが、トム  
がベッキーに代わって罰を受けるという形で提示されている。少年であっても  
好きな彼女に対しては騎士の如くに守ってやりたいという気持ちを持つもので  
あろう。好きなベッキーに対するトムの思いやりは様々あるが、その一例がベッ  
キーに代わって鞭打ちの罰を受ける描写である。

...when he stepped forward to go to his punishment, the surprise, the grati-  
tude, the adoration that shone upon him out of poor Becky's eyes seemed  
pay enough for a hundred floggings. (p.165)

このようにトムはベッキーに代わって罰を受ける時、奇妙にも輝かしい栄光  
の如くに感じているのである。ベッキーからの感謝と賞賛のまなざしが彼の胸  
をときめかし、それだけでトムは満足感に酔いしれているのである。作品の中  
に描写されているそのような光景は、作者トウエインの遙か昔の懐かしい想い  
出となって脳裏に焼き付いているものと考えられるのである。ベッキーのモデ  
ルとなっている少女との淡い恋物語は作者にとって忘れがたい少年期の想い出  
のひとつであろう。ベッキーのモデルは実在の人物であるが、そのことは別の  
拙論で記しているので、ここでは詳細を記す必要はないであろう。<sup>7</sup>



トムとベッキーの小さな恋の進展には色々な曲折があり、いかにも幼い恋の物語という印象を与えているが、これが作品の肥やしになっている。その曲折の一例として、トムがベッキーに冷たい態度をとる場面がある。ジャクソン島から帰ったトムは村のヒーローとしてもてはやされ、トムは次のような態度で、わざとベッキーを無視するのである。“Tom decided that he could be independent of Becky Thatcher now. Glory was sufficient. He would live for glory.”

(p.153) このように好きなひとを意識的に無視するという態度は少年期にはありがちである。心の中で思っていることとは裏腹に、逆の態度をとってしまうことは少年期にはよく見られる傾向である。好きであっても、好きでないような素振りをしたり、冷たい態度をとったりするのは少年期の恋の特徴ではないだろうか。

色々曲折はあるものの、結果的にトムはベッキーを想いやり、最後まで守り抜くのである。その最たるものは洞窟の中からベッキーとともに生還する件であろう。トムとベッキー、その他大勢の少年少女がピクニックに行き、洞窟に入り、トムとベッキーが洞窟内で迷子になり、出口が分からなくなるという件がある。洞窟の中は真っ暗闇である。作品の時代背景は1840年代である。その時代には電気はないので、蝋燭の灯りだけが頼りである。その蝋燭を使い果たした後、洞窟の中は真っ暗闇である。もちろん昼とも夜とも区別がつかないのである。そのような洞窟から出られなくなり、トムとベッキーは洞窟の暗闇の中で何日か過ごすという設定である。この件が進行するのと平行して、インジャン・ジョーが恐ろしい殺人事件の真犯人であることが判明しているという件と、ハックがダグラス未亡人をインジャン・ジョーの襲撃から未然に防ぐという手柄話が同時進行し、これらが相互に絡み合って作品全体のクライマックスへと繋がっていくのである。

マフ・ポッターの裁判で、トムが真犯人はインジャン・ジョーであることを証言し、トムは“a glittering hero once more” (p.189) というようにまたしてもヒーローとして脚光を浴びるのである。逃走したインジャン・ジョーの件と少年の宝探しの件、そしてトムとベッキーとの恋の件が相互に絡み合って一連の物語は進行するのである。トムとベッキーが洞窟の中で蝋燭を使い果たし真っ暗闇になり、不安の極地に立たされているとき、少し離れた岩陰の暗闇の中に、かすかな明かりが見え、その中にインジャン・ジョーの姿が浮かび上

がった時、トムとベッキーの恐怖心は極度に達しているのである。結果的にはそのような極限状態からトムとベッキーは救出されることになるのであるが、そこが作品としてひとつのクライマックスである。またそれはトムにとってヒーローとなるチャンスである。そしてトムとベッキーが救出されたときの村は祭りのような騒ぎである。トムはまたしてもヒーローに仕立て上げられる結果となるのである。

“The village was illuminated; nobody went to bed again; it was the greatest night the little town had ever seen.” (p.248) という文が示す通り、トムはまた渦中の中心人物となりこの物語の主人公にふさわしい地位を与えられるのである。そしてトムは後日この洞窟での出来事を誇大化して話すのであるがその様がトムの特徴をうまく表していると言える。もちろんそれが作家の技法であると言えるだろう。

最後にインジャン・ジョーは洞窟で息絶え、トムとハックは宝探しの結果大金を手に入れ、そしてダグラスDouglas未亡人はハックを命の恩人として感謝し、彼を養子にしようというところで、この物語は終わりを迎えるのである。このようなユニークで変化に富んだ少年の生き方そのものが冒険であると言えるだろう。

主人公としてのトムについて、批評家のClark Griffithは次のように指摘している。

...the book turned out the repository of mystery is Tom himself. The truth is that he claims and is granted an air of the fabulous and transcendent; he walks through the village as larger than life-sized, endowed with a status bordering on the supernatural. In a parallel that always excites him he is transformed into a village Aladdin: the Aladdin of St. Petersburg, replete with “lamp” and genies.<sup>8</sup>

この指摘通り、トムは等身大以上に作品の中で振る舞っていると言えるかもしれない。確かにその通りであると言えるだろう。別の言い方をすれば「実質的には3人のトムがこの本の中に同居している」(“In effect three Toms cohabit the book.”)<sup>9</sup>ということである。しかしそのことは作者がPREFACEで「トムは3人の実在する人物を混成して」ひとりのトムを作り出しているこ

とを明示しているのである。作品の中では3人分をひとりに結合しているので、トムひとりで密度の濃い生活をしているように見えるのは当然であろう。そして作品の狙いは完璧に達成されているのである。等身大以上に振る舞っている説明はそれで十分であろう。

## 結 論

トムは日常生活を送る中で、様々な法則を発見している。ペンキ塗りの場面でもある法則を発見し、またイギリスの裕福な紳士が馬車に乗るのも職務となれば「したくない」という例を挙げて、人間の微妙な心理をトムが発見した形にして読者に提示しているのである。また “Now he found out a new thing...”

(p.176) という一文の続きに、発見したものを提示している。何かを「してはならない」という場合、かえってそれをしたくなり、「してもよい」という場合逆にしたくないという心理状態になるということを、トムが発見した形で提示しているのである。そのような新しさの発見が少年にとっては冒険である。この作品はトムが次から次へと新しいものを発見することから成り立っている。当然それは作者の人生経験をトムに投影し、トムの冒険という形にしたものである。

トムという少年はごく普通の少年であるが、彼の奇抜な発想が物語の中心を担っている。彼の日常生活の中にユニークな出来事が展開し、その中に新発見がある。失敗したら命を落とすような危険な冒険ではなく、成長期の子供が経験するいたずらや、日常生活の中での新しさの発見が彼らにとって冒険である。ユニークで奇抜な少年の生き方そのものが冒険であると言えるだろう。

この作品は作者の少年期を過ごしたハニバルをモデルとしている。懐かしい故郷の思い出を文学の領域に取り込んでいるのである。少年時代の思い出を題材にして文学作品を描くことは作家としてのトウェインにとって重要な課題である。別の言い方をすれば、自己の懐かしい思い出の数々を形のある文学作品に仕立て上げることである。そしてその作品の中に描いた少年のいきいきした姿を読者に提示することが、作品の重要な意義であると言えるだろう。そのような作者の意図を最大限に具現した作品である。

## Notes

1. Stephen Railton, *Mark Twain: A Short Introduction* (Malden: Blackwell Publishing, 2004) p.34.
2. Larzer Ziff, *Mark Twain* (Oxford: Oxford University Press, 2004), p.64.
3. Mark Twain, *The Adventures of Tom Sawyer* (New York and Oxford: Oxford University Press, 1996), p.8. 以下同書からの引用は本文中の( )内に出典ページを示す。
4. William E. Phipps, *Mark Twain's Religion* (Macon: Mercer University Press, 2003), p.14.
5. Railton, *op. cit.*, pp.44-45.
6. *Ibid.*, p.45.
7. 拙論「マーク・トウェインの『トム・ソーヤーの冒険』について―登場人物とモデル」武庫川女子大学英文学会 *Mukogawa Literary Review*, No.27. 1991年発行
8. Clark Griffith: *Achilles and the Tortoise of Mark Twain's Fictions* (Tuscaloosa: The University of Alabama Press, 1998), p.132.
9. *Ibid.*, p.136.